

○耕種的防除

- ・黒葉枯病対策として連作の回避、適正な施肥
- ・線虫密度低減対策として、前作に対抗植物（えん麦野生種やマリーゴールドなど）を栽培
- ・乾腐病軽減対策として、排水性改善、適期収穫

(5) 植物成長調整剤の使用

使用しない。

C 栽培に当たっての留意事項

○線虫密度が極端に高い圃場では、対抗植物を栽培した場合でも十分な効果が得られないので注意すること。

D 栽培に当たっての禁止事項

なし

E 肥料及び化学肥料の使用基準

分類	慣行	使用基準			
	化学肥料施用量 (kg/10a)	総窒素施用量 (上限値、kg/10a)	たい肥等施用量 (下限値、t/10a)	化学肥料施用量 (上限値、kg/10a)	たい肥施用量 (上限値、t/10a)
露地	16.0	15.0	2.0	10.0	3.0

注1 窒素肥沃度水準「低」の場合の基準である。ただし、化学肥料施用量は窒素肥沃度水準「中」の基準を上限とする。

注2 たい肥1 tあたり1 k gの窒素換算量とする。ここでのたい肥とは、「牛ふん麦稈たい肥」、「牛ふん敷料たい肥」を指す。

注3 たい肥等施用量下限値は、たい肥に相当する有機物での対応も認めるものとする。

注4 たい肥施用量は輪作内での平均値も認めるが、1年間の施用量が5 tを超えないものとする。

注5 たい肥施用量上限値は「牛ふん麦稈たい肥」、「牛ふん敷料たい肥」を施用した場合にのみ適用するものとする。

F 化学合成農薬の使用基準

(単位：成分使用回数)

作型	慣行						使用基準												
	殺菌剤		殺虫剤	殺虫・殺菌剤	除草剤	植調剤	計	殺菌剤		殺虫剤		除草剤		植調剤		計			
	(種子消毒)	殺菌剤						基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	基幹	臨機	合計	
春まき(トンネル,露地)	5	(2)	2	0	2	0	9	3	(2)	0	0	1	1	0	0	0	4	1	5
春夏まき	6	(2)	2	0	2	0	10	3	(2)	1	0	1	1	0	0	0	4	2	6

注1 使用基準は剤別（殺菌剤・殺虫剤・除草剤・植物成長調整剤）及び基幹・臨機防除別に記載

基幹防除：平均的な病害虫の発生状態を考慮した場合、ほぼ毎年行う必要がある防除

臨機防除：突発的な病害虫の発生や、地域や品種により発生状態が異なる病害虫に対して行う防除

注2 種子消毒は殺菌剤の内数とする。

注3 生産集団の栽培基準における化学合成農薬の使用回数は、使用基準の合計回数を下回るものとする。

注4 使用基準における化学合成農薬の剤別の使用回数は、地域の栽培実態に合わせ変動して差し支えない。

【参考：作型（地域別）】

作型	道央地域						道南地域						道東・道北地域						
	は種期		定植期		収穫期		は種期		定植期		収穫期		は種期		定植期		収穫期		
	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	始	終	
春まき（トンネル、露地）	4/5	4/30	-	-	7/10	8/20	4/1	4/30	-	-	7/5	8/15	-	-	-	-	-	-	-
春夏まき	5/5	6/10	-	-	9/1	10/31	5/1	6/30	-	-	8/20	10/31	5/1	6/10	-	-	8/10	10/31	-

注1 道央地域：石狩、後志、空知、胆振、日高管内とする。

道南地域：渡島、檜山管内とする。

道東・道北地域：上川、留萌、十勝、網走、釧路、根室管内とする。

注2 作型は地域別の平均的な昨期を示したものであり、地域の栽培実態により当該期間が前後する場合がある。

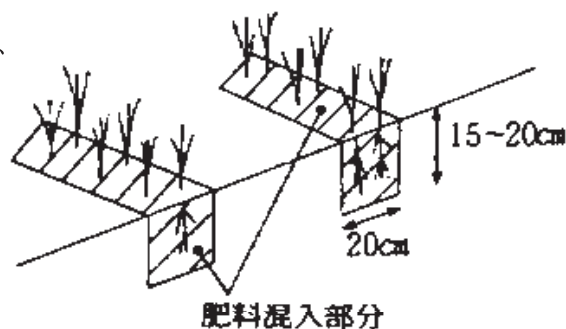
G 注釈

●土壌診断による施肥の適正化

生土培養窒素または熱水抽出性窒素の分析を行い（3年以内）、窒素肥沃度に応じた施肥を行う。

●带状全層施肥法による窒素の利用効率向上

施肥播種同時作業機により、带状全層施肥（施肥幅20cm、深さ15～20cmの範囲）を行い、基肥6kg/10a、追肥4kg/10aに窒素量を削減可能。



●無機化の早い有機質肥料の使用による化学肥料の100%代替

魚かす、ナタネ油かす、ダイズ油かす及びそれらを主体とした窒素無機化の早い有機質肥料を用いることにより化学肥料を100%代替できる。ただし、生育が化学肥料100%栽培に比べ生育後期で旺盛となりやすいので、収穫時期を適期に行うなどの注意が必要である。作型は、春まき、夏まき共に適用できる。栽培当年の有機物施用は規格内率を低下させる恐れがあるので、有機質肥料の施用は前年秋に行う。また、魚かすを用いる場合は、ハエ等を誘引するのでその防除に留意する。

有効水が少なく過乾となりやすいなど有機物の分解が不安定な土壤を除く。窒素肥沃度が中程度以上の土壤に対して適用する。

●黒葉枯病防除対策

YES!cleanで化学合成農薬の成分回数にカウントされない農薬であるポリオキシシン複合体剤は効果が高く、化学合成農薬の代替剤として有効である。

●乾腐病軽減対策

乾腐病は播種後60日目以降に土壤が過湿状態であると、その20～30日目から発病株が増加するため、収穫適期になり次第早めに収穫する。また、土壤水分が高いほど発生が増加するため、土壤の排水改善や高畦栽培は被害軽減効果がある。

●栽培前の土壌検診または簡易指標植物の栽培を利用した線虫密度の把握による防除要否の判断

●線虫密度低減対策として、前作に対抗植物（えん麦野生種やマリーゴールドなど）を栽培

○キタネグサレセンチュウ

・土壌健診 要防除水準： 5頭以上/25g土壌

検診法

- ①土壌サンプリング（作付け予定地より4、5ヵ所サンプリング）
- ②普及センター等で調査

・指標植物健診 要防除水準： 寄生度1以上

検診法

- ①土壌サンプリング（作付け予定地より4、5ヵ所サンプリング）
- ②サンプリングした土壌を15cmポリポットに充填し、ごぼうを4、5粒播種
- ③2ヵ月程度生育させる（本葉2～3枚）
- ④堀取り根を観察調査

○キタネコブセンチュウ

・土壌健診 要防除水準： 2頭以上/25g土壌

・指標植物健診 要防除水準： 寄生度1以上

線虫の寄生度

寄生度 (階級値)	ネコブセンチュウ (各作物共通)	ネグサレセンチュウ		
		ごぼう	だいこん	にんじん
0	コブが全くなし	黒変が全くなし	白斑・褐点が全くなし	褐点が全くなし
1	コブがわずか	根の一部が黒変 (注意すると認められる)	白斑・褐点がわずか	褐点がわずか
2	コブが中程度（散見）	根の数カ所が黒変 (一見して識別できる)	白斑・褐点が少ない	褐点が少ない
3	コブが多数	根の半分程度が黒変	白斑・褐点が全体に散見	褐点が全体に散見
4	コブが極めて多数（密集）	根の全体が黒変	白斑・褐点が全体に多数	褐点が全体に多数

要防除水準を超えた圃場では、対抗植物（マリーゴールド、えん麦野生種）を3ヵ月以上栽培してからにんじんを作付ける。播種量は、マリーゴールド（アフリカントール）は1.5kg/10aとえん麦（ハイオーツ）は15kg/10aが必要である。なお、対抗植物のすき込みは適期に行い、腐熟期間は十分にとる必要がある。後作緑肥としてはえん麦野生種が有効で、キタネグサレセンチュウ密度をごぼう・にんじんに対する被害許容水準である5頭/25g土壌以下にするために、えん麦野生種を8月10日頃に播種し、すき込み時の生育量は3,000kg/10a（草丈で80cm程度）を確保する。